アマチュアレスリングに於ける グレコ・ローマンとフリースタイルについて

笠原　茂

今日世界的には勿論の事，我国に於ける，アマチェアレスリングの興隆は目を見張らせるものがあり一般的なスポーツとして益々深部に浸透してきつつある事は，とかく他国のものに対して消極的な受入れにのみ走りがちな我国として凡ゆる面で非常に有意義な事である。然しながら我国に取入れられてから僅か四半世紀の間に然も戦時中は中断の憂目に会い乍ら，レスリングが最近諸国に肩を並べ得る程までに発達して来たのは決して単なる偶然によるものではなく，レスリングの持つ特殊性が日本人に体育的な感覚に適合したからに他ならない。

その発生の必然性

レスリングは，走る，跳ぶ，投げる，最も原始的かつ本能的なものに次いで起ったスポーツであると云える，古代の人々は，日常生活の中でしばしば野獣や他民族に遭偶した時さしたる武器を持たなかった為専ら格斗に勝って自己を守らねばならなかった，そして彼らは家族や仲間達と力くらべや掴み合いをして敵に対処するに効果的な格斗の方法を考える必要があった。それが，武器の発達に伴ない，次第にスポーツとして用いられる様になり人々の集りの祭礼や儀式には欠かせぬ重要な行事と変って行った。スポーツとしてのレスリングは初め現在行われているフリースタイルに似た規則で行われていたが相手を傷つける事が許されて居り，野蛮なものであったが，時代の進歩にいれ規則が厳しくなり純然たるスポーツとしての形態を持つに至った。古代オリンピアードから近代オリンピックえとスポーツの祭典も変遷して来たが一貫してその競技種目の筆頭であった事は如何にレスリングが大衆のものであり皆んなから愛好されていたかその発生と共に考え併せ興味が深い。前述の如く，レスリングは古代オリンピアードから近代オリンピックえと時の変遷にも拘わらず終始重要種目として数えられグレコロマンスタイルとフリースタイルの二つに完全にスタイルが分れグレコ・ローマンスタイルは1908年第3回からフリースタイルは1904年のオリンピック大会に加えられ今日尚もその隆盛をみるに至っている。

〝レスリング世界の分布図〟

国際的になった日本

レスリングの本場はトルコであると云伝えられている程トルコはレスリングの盛んな国である。他国と違ってこの国に普及しているスポーツは極めて少く重量挙にサッカーだけと云っても良い程従ってトルコに於けるレスリング人口は他国の比ではなく幼時からレスリングを教えこんでいるので層の厚さも抜きんでており，その底辺と高さは一際大きなピラミッドで形容しても良い，続いてはここ数年来台頭著しいソ連，イラン，ブルガリア，アメリカ，それにスエーデン，等で日本もこれら各国に比肩し得る。然し乍ら日本に於ける選手層は殆んど学生に限られており各国が社会人を主体としているのに比較して見ると選手層の点に未だこの感がある点今後の重要な課題となる。1936年第15回ヘルシンキ大会までの16年間の空白を僅か数年の間に埋め前記一流国群と対等に試合を進め得る迄に進歩発達して来た我国の将来は決して悲観的ではない。国際試合に於ける今一つの課題は重量級の強化と云う点である，これは体位の問題でもあろうがこの点に一考なくしては一段の飛躍も望み難いのである。

〝レスリングの発達と変遷〟（グレコ・ローマンスタイル）レスリングの段階的な歴史はあまりよく知られていないが，はっきり型を生じたのはギリシヤに於いてである原始的で無規則だったこの競技がようやく規則の必要性が認識され始めたが最初の規則は極めてルーズで現代行われているフリースタイル(後述)の前身の様なものであったが，相手を傷つける事が許されていた。それにも拘らず人々はより残酷な技を要求し始め拳斗に相

撲と空手をミックスした様なパンクレーション（拳斗相撲）を発生させるに至った。然しこのパンクレーションもその野蛮性が飽きられ始め後にローマ人の時代となってからはパンクレーションから荒技を除外し相手の腰から下に手や足をふれる事を禁じてグレコ・ローマンスタイルを生み出した，このグレコ・ローマンスタイルによるレスリングも昨今世界各国で取り入れられ盛んになって来たが近代レスリング史に於いてはフリースタイルに圧されて来た為，現今でも中近東方面のイタリー等で盛んに行われているに過ぎない。

日本では昨年から全日本選手権（1957年）より我国にも取入れられたが，ギリシヤで生れてローマで育ったこのグレコ・ローマン・スタイルが英国に移入されてから初められたもので，その名のごとく腰から下に手や足をふれる事や足技を使わぬ点がグレコ・ローマンの異なる点であった。以来キャッチアズ・キャッチ・キャンスタイルと呼ばれたレスリングが英国に発生して1948年ロンドン大会より，長い名称をやめてフリースタイル（自由型）と正式に名を変えたのである。これは前記と違って行動に制限なくその上試合内容もスピーディに行われ面白いので盛んになり，世界に汎がる英国の植民地に移入され，遂に世界各国に発達したのである。

今迄の我が国レスリング界はフリースタイル（自由型）を昭和6年から採用し，専らそれを行ってきた。しかし昨年第1回のグレコロマンスタイルの全日本選手権を行ったのを皮切りに今後このようなスタイルによるレスリングがわが国でも行なわれるようになった。ではこのフリスタイルとグレコ・ローマンスタイルとどのような点に違いがあるのか，以下それを比較検討してみよう。

1．フリースタイル，これは前述のごとく日本のレスリング創始以来採用されてきた型であるが，これもおよそ25年に及ぶ歴史の間いろいろとそのルールの変更発展が行われて来た。これはレスリングというものの発展する過程において当然の変遷であり他の多くのスポーツと同じことといえるわけである。つまり大昔のレスリングは草原の上で二人の人間がつかみ合い相手の両肩を地につけるまで時間的制限を設けずに行ったのをその原始的な形態としたのであるから現在のように審判規定など，複雑な問題を含む形態に発展するまでの間には，ルールにそれ相応の変革なり改正なりが行われたのは当然のことであろう。

この発展の段階を通じて原始的から野蛮といわれたレスリングが今日のように学校体育の正課授業として正式に採用されるようになったのである。そして今日このスポーツは正課体育として一般学生の選択し得るスポーツとなったばかりではなく科学的スポーツとまでいわれるようになったのも，やはりその発展の段階を通じてである。わが国がこれまで行ってきたフリースタイルの審判規定は，全く日本独自なもので，国際試合などで非常に障害を来たしたこともあるが，現在では一昨年から採用の国際オリンピックルールによって統一されている※フリースタイル・グレコ・ローマンのオリンピックルールは別表に掲ぐ）

そのフリースタイルの変遷の中で最も大きな変革は時間の短縮とそれに今までにない規則として引き分けが生まれたことであろう。時間の短縮は初め（第1スタンド）6分，第1グランド3分，第2グランド3分，第2スタンド3分の計15分間が一昨年からグランド2分ずつ第2スタンド2分と短縮，計12分になっている。
（これはグレコ・ローマンも同じ）

まだ引分けは双方互角の場合に判定されるものであるが，これまでは全く互角と見られる試合でも必ず優劣の判定が下されたものである。さてこれらのルールの変革について私見を述るならば，時間短縮については，これまでよりスピーディな試合運びが要求されるから，技術の向上と云う面で進歩が考えられるし，一方試合を見る立場の第三者としても，試合のスピードアップと云うことで興味は増加する。又引き分については双方互角であった場合に優勢勝となったものは得点差のない勝利である為心理的にも勝った気がせず負けた方でもそれと反対の心理現象が起るのに対し，得点が1点以上開かなければ完全な勝利が得られない新ルールでは双方では，死力をつくして1点を争うようになりやはりその面で，力と技術の向上とが，期待されると思うがしかしレスリングの本分としては飽くまで試合を決するのが建前であるから，一寸考えものである。例えば引分に持込もうとする消極戦法に出る選手が出ないとも限らな

い。ではフリースタイルとはどんな型か簡単に記してみよう。

これは一口に云うと自由に行うスタイルでグレコ・ローマンと違って手や足を自由に駆使して相手のどの部分にふれても良いと云うのである。攻撃目標に制限がないので全身を使用して相手の隙のある部分を攻める事が出来るが相手も同じ考えなので必然的に力よりも技術の応酬で，試合が進められる。技術で立向う為には，相手を上回る技術を以てせねばならないので，自然に選手の研磨を呼びその結果試合は益々高級から深みのあるものとなるスピードと技の点についてはグレコロマンスタイルより上まわるが，豪快さに於いては，グレコの方がすぐれている点は相異っている。

2．グレコ・ローマンスタイル

このスタイルを何故日本で行わなかったか，先ず第一に湧く疑問であるがこれはフリースタイルを完全にマスターする為に敢て取り入れなかったのであるが加えて日本人の特長とも云うべき足技，腰の強さと粘りを十分に発揮出来ない事などが主な原因である。近来ヨーロッパ特に，フイランドスエーデンハンガリー等で盛んにこのスタイルが取り入れられて居り，中近東方面ではフリースタイルよりもこのスタイルが盛んである。これは日本人にくらべて伝統の発生と下半身が弱く，その為に上半身を用いるグレコ・ローマンスタイルが盛んになったと云うことが出来る。従ってこの様な現状は肉体的な条件によるものではなく，その国々の国民性に基くものであると考えた方が適当である。

とにかくこのスタイルには，オリンピック種目に既に古代から加えられている以上我が国としてもレスリングと云うものを広義に考えた場合昨年に至ってこのスタイルを正式に取り上げたと云う事は遅き失したのである。

このグレコ・ローマンスタイルはフリースタイルに比較して腰から下を使用出来ないので試合する当人に如何にも不便で第三者にとっても興味薄であるが腕力を最大限に発揮する力の衡笑と撃勢から脱する際のブリッヂの豪快はフリースタイルに見られぬものがある。このグレコ・ローマンに見られる特長をフリースタイルに活用する事もレスリングの発展を押し進める一つの課題であり研究する必要がある。特に投技や捨身技は国際試合の際，外国選手がフリースタイルに活用している為，日本選手が苦戦する事がしばしばあり世界に対攻する為にも早急に取り入れたのは非常なるプラスとなる。

このグレコ・ローマンスタイルに於ても試合時間はフリースタイル同様に短縮し技術の向上とスピーデーな事を主としするならば可能な範囲に於いて，時間は短かい方が良いだろう。結論としてはルールの改正には前記のように幾つもの矛盾し合う要素を最も合理化しそのものをより高度に，よりスピーディーに進めるものである。そして又やる方は勿論見る方も面白く楽しく合理性をともない，この点慎重に綿密に，しかもレスリングを理解して行かなければならない。そして又マットの円形化による改良なども試合を益々興趣あるものえと導くのであろう。レスリングは年々進歩して来ている。

そして今後より強くより伸展する為には審判員の向上と，たゆまぬ学科的かつ合理的な研究が一層望まれるそしてそれが世界のレスリングへの通じる唯一の道であるべきであろう。

6．新ルールの採用

ストレートスルー

我が国では従来ストレートスルーは用いなかった。これは我国の弱点であるグランドレスリングを強化する為その処置をとって来たのだが1953年のメルボルンオリンピック大会以後その必要性に鑑み用いる事と決められた。

ストレートスルーとは

最初のスタンドレスリング6分間の間に一方が3点以上相手を引離して最初の方が二本以上あがった場合ストルートスルーとなり以後のグランドレスリングを行わず最後までスタンドレスリングを続ける事が出来る，但しこのストレートスルーを得点者が棄権した場合はレフリーのトフによって攻撃を決めてグランドレスリングをやる事になる。又第1ランドの終りに限り一方相手をフオールの体勢に押え込んでいる時は，6分が経ってゴングが鳴っても試合はそのまま続けられ喰込んだ時間だけ最後のスタンドの時間より引かれる。

フリースタイル新旧ルール

	第1スタンド	第1グランド	第2グランド	第2スタンド	合計
新規則	6分	2分	2分	2分	12分
旧規則	6分	3分	3分	3分	15分

グレコ・ローマンスタイル

	第1スタンド	第1グランド	第2グランド	第2スタンド	合計
新規則	6分	2分	2分	2分	12分
旧規則	10分	4分	4分	2分	20分

新規則採点法

1　スタンドレスリング中きれいに相手を投げた場合1点

2　スタンドレスリングに於いてタックル等して相手の背後に廻り制した場合1点

3　危険な状態を5秒以上継続させた場合3点

4　危険な状態を3秒以内押さえた場合2点

5　瞬間危険な状態にさせた場合1点

6　グランドレスリング中撃者が攻者の背後に廻って制した場合$^1/_2$点

7　レフリーから警告あるも反則した場合2点

8　マットからはい出したり逃げ歩くもの1点

新ルール以上

旧ルール

1　スタンドレスリング中相手をきれいに投げた場合1点

2　マット内にタックル等して相手の背後に廻って制した場合

3　相手の背中をマットに向せ有効なホールドを取った場合1点

4　全ランドに於いて得点のない場合優勢者に対して1点

5　エスケープ(レフリーの警告あるも逃げる点)した場合1点

6　グランドレスリングに於いて相手の背後に廻り制した場合1点

旧ルール以上